

## 「土浦の花火」を始めた住職

コロナ禍以来、お盆が過ぎると、話題は夜空を彩る光のイベントに。「今年は開けるんだらうか」。土浦市民や県民の淡い期待は今年も打ち砕かれた。9月7日付の新聞に「土浦花火、2年連続中止 コロナ対策困難 関係者『やむなし』」（『茨城新聞』）の記事。

「土浦の花火」は、「大曲の花火」で有名な秋田県大仙市の全国花火競技大会と並ぶ全国レベルの花火大会。中止の決定は、観る側にとどまらず苦心の花火を打ち上げる業者にとっても痛手だ。土産・飲食店など地元の商工業者にもつらい選択である。

花火大会は一夜のイベントである。しかし、その「天空ショー」には様々な思いが詰まっている。観る人に歓喜や癒しを与えるだけでなく、花火業者の技術向上、地元商業の活性化、土浦のイメージアップなど様々な分野にインパクトを与える。

そんな「土浦の花火」は、大正14年(1925)9月に第1回大会が霞ヶ浦湖畔で開催された。開催に奔走した人物は、土浦市文京町にある曹洞宗、宝珠院神龍寺、第24世の秋元梅峯

(1882－1934)である。秋元梅峯(以下梅峯と略)は当時、「大日本仏教護国団」を組織し、布教伝道や貧民救済などに身を粉にして活動していた。

当時の土浦町は「軍都」の色に染まり始めていた。大正10年(1921)、隣接する阿見の台地(現阿見町)に旧海軍霞ヶ浦飛行場が発足。同11年、同飛行場は霞ヶ浦海軍航空隊と名を替えた。そうした中で大正12年(1923)9月、関東大震災が起きた。

梅峯は、同護国団の団員を率いて震災で被災した住民の救済に奔走。神龍寺に1日数百人の避難民を宿泊させ、境内に天幕を張り、炊き出しと施療を行った。さらに復興には規則正しい生活が不可欠と、朝5時と正午の時間を知らせるモーターサイレンを境内に設置した。

花火大会の開催はこの救済活動の延長線にあった。梅峯の足跡をまとめた『水郷の傑僧』には「国家の犠牲者たる英霊を弔うためと、団員死亡者の追善供養、これに兼ねて震災に倒れた哀れな魂の冥福、それには大衆が集まる花火興行より善き供養はない」とする梅峯の

## 秋元梅峯

Akimoto Baiho

思いが記述されている。「しかし、耳を傾ける有志者はなかった」

梅峯はさらに訴える。「この花火大会を行えば東京及び近県の観客は、十万を超えるであろう。そうすれば土浦の町民が受ける収入は一夜に於いて莫大の額に上るであろう。税金は滞納、金融は杜絶、失職者ばかり年々増加する土浦町を救う者は、けだし(思うに)花火に越した妙案はないであろう」と。

やがて梅峯の熱意に共感する人や商人も現れた。こうして今日まで続く花火大会は、日の目を見ることになった。

土浦市立博物館発行の『土浦と花火』では「梅峯が組織した同護国団が主催し」、開催趣旨に「霞ヶ浦海軍航空隊殉職者の慰霊、商工業の活性化、秋の収穫への感謝など」をあげている。さらに当初の大会では「神龍寺本堂を全国から集まった花火師の宿舎にした」と記されている。

神龍寺発行のパンフレットにこんな紹介がある。「霞ヶ浦海軍航空隊に副長兼教頭(1924－1925)として勤務し、神龍寺隣りで官舎住まいしていた山本五十六元帥も、この花火

を見ては暫し心を和めたと思われます」と。来年こそコロナ禍を鎮め、再開を期したいものである。(文中敬称略)

### 主な参考文献

『大法輪』(「水郷の傑僧」杉本昌夫、今村恒美画、昭和11年7月号、大法輪閣発行)。『花火と土浦一祈る心・競う技』(土浦市立博物館開館30周年記念特別展、平成30年、同博物館発行)等。



神龍寺本堂手前にある梅峯大和尚の像  
＝土浦市文京町(筆者撮影)

### 歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「時の周知」のヒント